

1. オーストラリア連邦

<まとめ>

オーストラリアからの回答書などにに基づき、我が国に輸入される牛肉等の評価を行った結果、侵入リスクは、1986～1997年は「無視できる～非常に低い」、1998～2007年は「無視できる」と考えられた。また、国内安定性の評価は1986～1997年は「暴露・増幅する可能性が高い」、1998～2002年は「暴露・増幅する可能性が中程度」、2003～2007年は「暴露・増幅する可能性が低い」と考えられた。

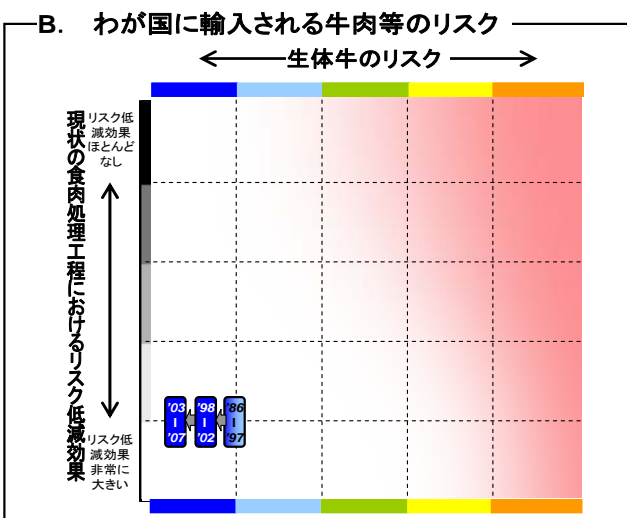
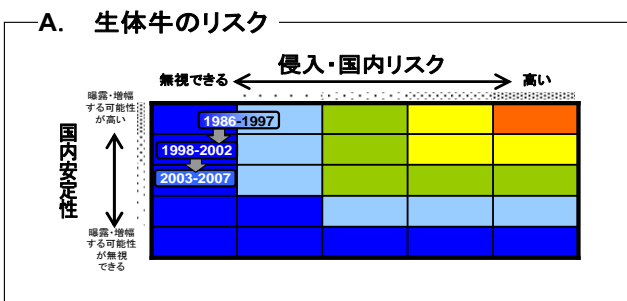
これら侵入リスクと国内安定性の評価の結果から、国内でBSEが暴露・増幅した可能性は無視できると考えられる。

サーベイランスでは、これまでにBSE陽性牛は発見されておらず、直近7年間のサーベイランス結果についてOIEで利用されているポイント制に基づき試算したところ、95%での信頼性で、成牛群の有病率が10万頭に1頭未満であることを示す基準を満たしていると推定された。

また、食肉処理工程におけるリスク低減効果は「非常に大きい」～「大きい」と推定された。

以上から、オーストラリアでは、国内でBSEが暴露・増幅した可能性は無視できると考えられ、さらに食肉処理工程におけるリスク低減効果も「非常に大きい」～「大きい」と推定されたため、オーストラリアから我が国に輸入される牛肉等がBSEプリオンに汚染されている可能性は無視できると考えられる。

<参考図>



期間は出生コホート(牛の誕生年)を示す

2. メキシコ合衆国

<まとめ>

メキシコからの回答書などにに基づき、我が国に輸入される牛肉等の評価を行った結果、侵入リスクは、1986～1990年が「無視できる」、1991～1995年が「低い」、1996～2000年が「中程度」、2001～2005年が「低い」、2006～2007年は「無視できる」と考えられた。また、国内安定性の評価は、1986～2000年は「暴露・増幅する可能性が中程度」、2001～2007年は「暴露・増幅する可能性が低い」と考えられた。なお、2001～2005年及び2006～2007年の期間については、侵入リスクの他に、侵入リスクと国内安定性を踏まえた国内リスクを考慮した。

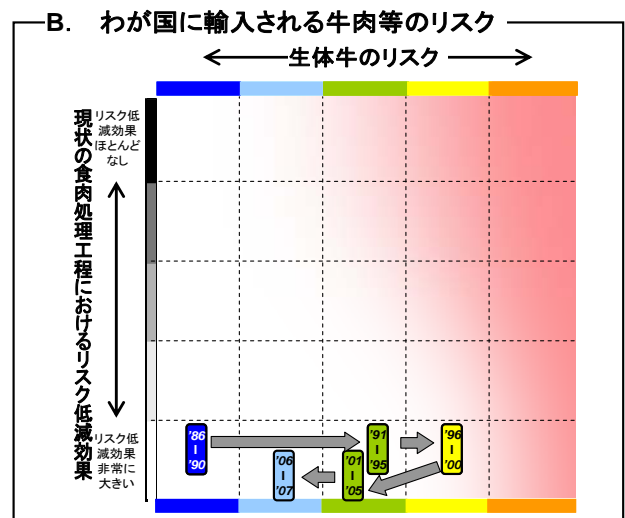
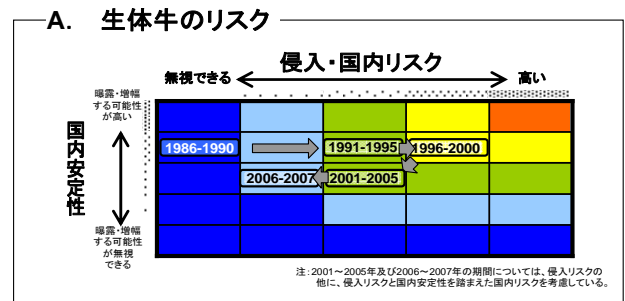
これら侵入・国内リスクと国内安定性の評価の結果から、過去に国内でBSEが暴露・増幅した可能性は否定できないが、その後国内安定性が改善したため、現在は国内でBSEが暴露・増幅している可能性は低いと考えられる。

サーベイランスでは、これまでにBSE陽性牛は発見されておらず、直近7年間のサーベイランス結果についてOIEで利用されているポイント制に基づき試算したところ、95%の信頼性で、成牛群の有病率が10万頭に1頭未満であることを示す基準を満たしていると推定された。

また、食肉処理工程におけるリスク低減効果は「非常に大きい」と推定された。

以上から、メキシコでは、国内でBSEが暴露・増幅している可能性は低いと考えられ、さらに食肉処理工程におけるリスク低減効果も「非常に大きい」と推定されたため、メキシコから我が国に輸入される牛肉等がBSEプリオンに汚染されている可能性は無視できると考えられる。

<参考図>



期間は出生コホート(牛の誕生年)を示す

3. チリ共和国

<まとめ>

チリからの回答書などにに基づき、我が国に輸入される牛肉等の評価を行った結果、侵入リスクは、1986～2007年すべての期間において「無視できる」と考えられた。また、国内安定性の評価は1986～2000年は「暴露・増幅する可能性が高い」、2001年は「暴露・増幅する可能性が中程度」、2002～2004年は「暴露・増幅する可能性が低い」、2005～2007年は「暴露・増幅する可能性が非常に低い」と考えられた。

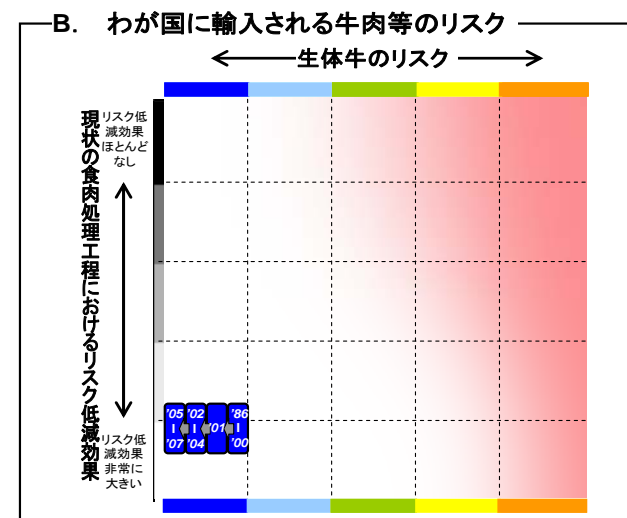
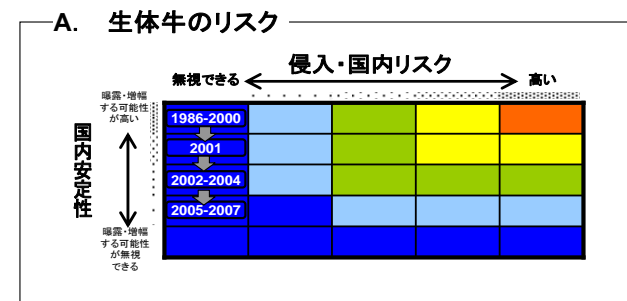
これら侵入リスクと国内安定性の評価の結果から、国内でBSEが暴露・増幅した可能性は無視できると考えられる。

サーベイランスでは、これまでにBSE陽性牛は発見されておらず、直近7年間のサーベイランス結果についてOIEで利用されているポイント制に基づき試算したところ、95%での信頼性で、成牛群の有病率が10万頭に1頭未満であることを示す基準を満たしていると推定された。

また、食肉処理工程におけるリスク低減効果は「非常に大きい」～「大きい」と推定された。

以上から、チリでは、国内でBSEが暴露・増幅した可能性は無視できると考えられ、さらに食肉処理工程におけるリスク低減効果も「非常に大きい」～「大きい」と推定されたため、チリから我が国に輸入される牛肉等がBSEプリオンに汚染されている可能性は無視できると考えられる。

<参考図>



期間は出生コホート(牛の誕生年)を示す

4. コスタリカ共和国

<まとめ>

コスタリカからの回答書などにに基づき、我が国に輸入される牛肉等の評価を行った結果、侵入リスクは、1986～2007年すべての期間において「無視できる」と考えられた。また、国内安定性の評価は、1986～2001年は「暴露・増幅する可能性が高い」、2002～2007年は「暴露・増幅する可能性が中程度」と考えられた。

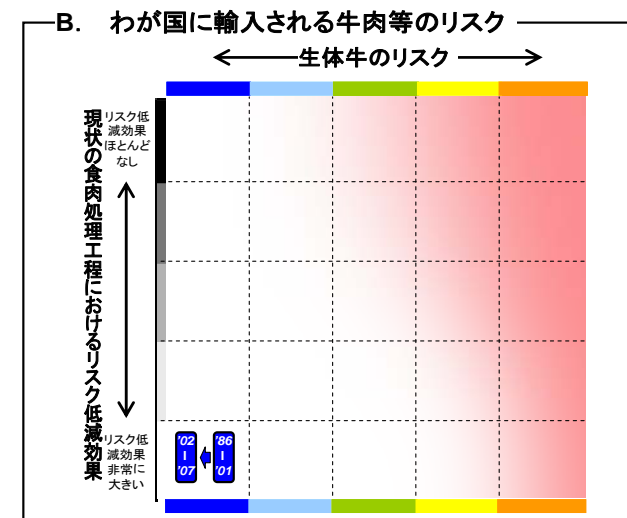
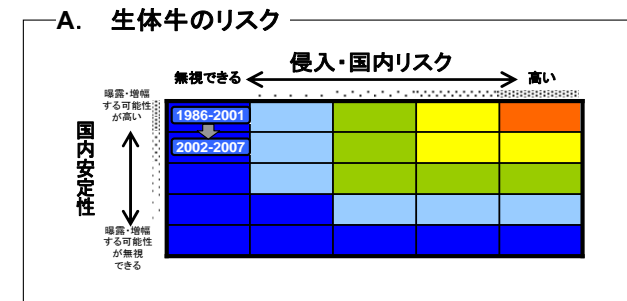
これら侵入リスクと国内安定性の評価の結果から、国内でBSEが暴露・増幅した可能性は無視できると考えられる。

サーベイランスでは、これまでにBSE陽性牛は発見されていない。ただし、直近7年間のサーベイランス結果についてOIEで利用されているポイント制に基づき試算したところ、95%での信頼性で、成牛群の有病率が10万頭に1頭未満であることを示す基準は満たしておらず、サーベイランスの改善を図ることにより、より高いレベルの科学的検証が可能になると考える。

また、食肉処理工程におけるリスク低減効果は「非常に大きい」と推定された。

以上から、コスタリカでは、国内でBSEが暴露・増幅した可能性は無視できると考えられ、さらに食肉処理工程におけるリスク低減効果は「非常に大きい」と推定されたため、コスタリカから我が国に輸入される牛肉等がBSEプリオンに汚染されている可能性は無視できると考えられる。

<参考図>



期間は出生コホート(牛の誕生年)を示す

